〔研究ノート〕

『天橋立図』のなかの雪舟の旅

室町時代の水墨画の巨匠、雪舟(1420―1506)は、晩年に入って『天橋立図』(京都国立博物館蔵)を描きました。その制作時については、文亀元年(1501)、82歳以後というのが定説になっています。

この画は、丹後国の名勝天橋立を中心に、(画面)右に元伊勢といわれる丹後一宮の籠神社(このじんじゃ)、修験道の霊場成相寺、左に「切戸の文殊」として有名な智恩寺、内海の阿蘇海の向う岸に右から府中の街、岩滝の村、また橋立を挟んで前方には宮津湾につき出た栗田半島(くんだ)の低い山々を包んだ実景図であります。

ところで、仏教の人たちがよく言う言葉に、「一期一会」(いちごいちえ)という言葉があります。すなわち、一生に一度しか会わない出会いを言います。昔から有名な場所、そこに自分がたまたま行って実際に見る。再び行くという保証はない。この出会いは不思議な因縁の結果なので、一生に一度しかないかもしれない。そういう経験をかみしめることが、仏教の方では大事だ、と言われています。おそらく、古来歌枕として名高い「天橋立」への雪舟の旅も、そういう「一期一会」の旅ではなかったか、と想像します。

実際に、雪舟がどのルートをとり、どこから天橋立の土地に入り、どのように歩いたかは、史料が残っていないので、確かなことは言えません。しかし、この画をじっと見ておりますと、雪舟が歩いた足跡、一つの道筋が見えてきます。というのは、この画には峠、路、橋、参道、鳥居、門、小堂、小祠、渡し船など、参詣の旅に関係するものが数多く、しかも克明に具体的に描かれているからです。

『天橋立図』は、雪舟が天橋立の地を旅し、彼の眼にふれ、心にのこった風景の印象の軌跡を描いたものと言えます。ちょうど、芭蕉が何年も推敲を重ねて書いた文学作品としての『奥の細道』に似ています。

さて、ここで、私たち一人一人は、雪舟の時代にタイムトラベルして、四国八十八個所巡りのお遍路さんが書く「同行二人」(弘法大師と自分の二人)のように、雪舟とともに、この画の世界を旅したいと思います。

この画の雪舟の旅は、画面左上の一軒の家がある峠の路、すなわち岩滝村の大内峠を越えるところから始まります。彼は、あこがれの土地に足を踏み入れたのです。その個所は、薄墨で明るく表されていますので、朝の早い時刻、朝靄の景と見ることができます。

雪舟は、まず大内峠から天橋立を自分の眼で見、その穏和な霊的な空間に心打たれたにちがいありません。その感動をもって、峠の路を下り、画面の右の方へ、つまり阿蘇海の北岸を東の方へ歩きます。

岩滝の村落を過ぎ、府中の街の入り口あたりに、鉢を伏せたような小山があります。濃墨で黒ぐろと表され、濃い墨線が縦に引かれ、印象的な表現です。それは高い木立、うっそうと茂った杜を表していると思われます。その小山の麓に鳥居があり、その山自体が神社の神域であることを示しています。

これは、岩滝の男山にある「板列八幡神社(いたなみはちまん)」を表しています。この神社は平安初期にすでにあった式内社で、山城国の男山にある石清水八幡神社と関係がある神社です。現在、山下に石造の鳥居があり、石段を百数十段ほどを上りますと、山上に八幡神社の神明造の社殿(江戸末期)があり、うっそうとした杉木立で囲まれています。社殿のそばに、御神木の大きな杉の古木が立っています。この神社には平安時代の木造女神像二軀(重文)が伝わっているので、この山は一度も火災にあったことがないのではないかと思われます。雪舟は、山上の社殿に参ったにちがいありません。ここからの橋立の眺望は、すばらしいものがあります。

板列八幡神社を後にして、丹後国の府中の「国分寺」をはじめとする寺々、「一宮」などの神社を参拝し、小さなお堂や祠を巡り、いくつもの石橋(橋の名前を記す)を渡り、橋立の付け根の浜にある「大松」から宮津湾の沖にある「冠嶋」「クツ嶋」を眺め、橋立の松林の路を通り、九世戸の海峡を舟で渡り、智恩寺に詣り、文亀元年(1501)に建てられた多宝塔を拝みます。そして宮津への路を進み、この「天橋立」の世界から雪舟は去って行きます。

この智恩寺の辺りは、中墨でやや暗い感じで描かれており、夕暮れを表したものと理解されます。としますと、この画は、半日の旅として描かれていると言えます。

雪舟が現実の「天橋立」から去った後、急に心の底から突き上げてくる旅の感動がこの画を描かせたのではないでしょうか。

じつは、この画の本紙は、美濃判の大きさ(縦約7寸7分、横約1尺3寸9分)の楮紙を横につないだ巻紙(記録用のものか)を截断し、それを貼り合わせてできています(20枚の紙をついだようになっている)。つまり、そのことは、この画が臨時に即興に描かれたことを物語っているのです。紙をつぎ合わせて大画面の本紙にしたのは、その大空間を表したかったから、そして実見し印象にのこった景物を、確と描きたかったからではないでしょうか。

さて、旅の途中、雪舟は、この地方の有力者、籠神社の社僧、大聖院の智海法印(八十余歳、不動明王図を得意とする修験僧。智恩寺の多宝塔を建てた)と会い、ひとときの旅を共にした、と考えられます。というのは、画中に「大聖院」の書き込みが、あるからです。

最後に、この『天橋立図』の主

大内峠から天橋立を眺望する

『天橋立図』にある杜と鳥居

岩滝町の板列八幡神社の鳥居

板列八幡神社の社殿と御神木

雪舟筆　天橋立図　紙本黒画淡彩　90.2×169.5cm

題について、私の考えを簡単に述べておきます。

この画の主題は、画の中にたくさんの文字の書き込み（雪舟の自筆）があることから、まず、府中の名所、寺院や神社を描くことが眼目と思われます。すなわち、「国分寺」「北野」「諸山寶林寺」「十刹安国寺」「慈光寺」「今熊野」「大谷寺」「世野山成相寺」「一宮」「大聖院」の十の寺院と神社です。つまり「丹後府中十景」であります。

つぎに、雪舟が描きたかったのは、「一宮・大聖院」の神域にある十の景色や景物と考えられます。禅宗の方では、これを「境致」と言います。風景の見所、風致のことです。すなわち、「忍橋」「忘橋」「弁才天」（二個所ある）「嶋堂」「正一位籠之大明神」（鳥居の扁額の文字。現在、当時の木造扁額が籠神社に伝わる）「千歳橋」「通堂」「大松」「冠嶋・クツ嶋」（一宮の奥宮）「橋立」（一宮の参道）の十の境致です。つまり「一宮大聖院十境」を描いているのです。

雪舟は、これらの建物や橋や木や島に名前をつけ、すでに名前のあるものは、その名前のままとし、要は、対象に名前をつけることで、禅宗特有のものとの対話を行っているのです。彼は一期一会と思って、命名したのでありましょう。後世の人の風景の目印となればよいと考えたのでありましょう。命名のために、地元の智海から、そのもののゆかり、地名の伝説を教わったにちがいありません。

この『天橋立図』は、その聖なる土地に住む智海への餞別のしるしとして、別れた後に、早速に描き、送り届けたものではないでしょうか。二人の「一期一会」の出会いと別れの意味を込めて、友情のしるしとして。雪舟がこの画に落款印章をしるさなかったのは、この画が、智海宛の書状（？）をそえて送り届けられるので、あえてそうする必要もないと思ったからではないだろうか。　（林進）

『天橋立図』の籠神社の神域

籠神社の鳥居扁額（室町時代）

季刊 美のたより No.104
平成5年8月19日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.